Hang 'em high

やつらを高く吊せ

馳星周 Hase Seisyu

講談社
文庫

|著者| 馳　星周　1965年北海道生まれ。横浜市立大学卒業後、出版社勤務を経てフリーライターとして活動。'97年、デビュー作の『不夜城』が吉川英治文学新人賞、日本冒険小説協会大賞を受賞。'98年には『鎮魂歌 不夜城Ⅱ』が日本推理作家協会賞、'99年『漂流街』が大藪春彦賞をそれぞれ受賞。著作は他に『ダーク・ムーン』『ブルー・ローズ』『沈黙の森』『エウスカディ』『淡雪記』など。

やつらを高く吊せ
馳 星周
© Seisyu Hase 2011

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

2011年5月13日第1刷発行

発行者——鈴木　哲
発行所——株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001
電話 出版部（03）5395-3510
　　販売部（03）5395-5817
　　業務部（03）5395-3615
Printed in Japan

デザイン—菊地信義
本文データ制作—講談社プリプレス管理部
印刷———豊国印刷株式会社
製本———株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。
本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-276967-9

目次

DRIVE UP 7
DRIVE OUT 63
POLICE ON MY BACK 121
GOING UNDERGROUND 183
PRIVATE HELL 249
SHOULD I STAY OR SHOULD I GO? 313
解説　吉田大助 380

講談社文庫

常州大学図書館
藏書

つらを高く掌

馳 星周

講談社

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

目次

DRIVE UP 7
DRIVE OUT 63
POLICE ON MY BACK 121
GOING UNDERGROUND 183
PRIVATE HELL 249
SHOULD I STAY OR SHOULD I GO? 313
解説　吉田大助 380

やつらを高く吊せ

Hang 'em high

DRIVE UP

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

Ｄｒｉｉｉｉｖｅ!!

85年型ポルシェ・カレラのエンジンが吼(ほ)える。落ちぶれた不動産屋からただ同然で巻き上げた真っ黒なカレラ。ハイオクガソリンを燃やして突っ走る。おれの体内ではコカインがアドレナリンの分泌を促(うなが)す。

八九年、夏。狂乱の好景気。地価は上がり続ける。株価は踊り続ける。モラルは地に落ち、欲望だけが孤独なワルツを踊る。

Ｄｒｉｉｉｉｖｅ!!

85年型ポルシェ・カレラが２４６を疾走する。渋谷から青山、麻布、六本木。欲望に忠誠を誓った連中のパラダイス。政治家が賄賂(わいろ)をねだり、地上げ屋や株屋が金をばらまき、タレントもどきの阿呆な女どもの股間に欲望をぶちまける。バーテンダー、ホステス、ボーイにウェイターにギャルソンはすべてをつぶさに目撃している。だれ

もが鵜の目鷹の目で金を儲けるチャンスを狙っている。スキャンダルはその辺に転がっている。金を儲けられない連中は金を儲けた連中の後ろ暗い行いを知りたがる。そら見ろ、まともな人間にあんな大金が稼げるはずがない。金儲けに乗り遅れた連中は自己欺瞞に浸りながら、ＮＴＴの株を手に入れる夢を見る。

Ｄｒｉｉｉｖｅ!!

85年型ポルシェ・カレラの助手席には一眼レフが転がっている。おれは写真を撮り、写真を売る。買い手はごまんといる。写真週刊誌はわが世の春を謳歌している。食いっぱぐれることはない。おこぼれにありつけない日はない。おれの写真に政治家たちは失禁する。地上げ屋どもは殺意を燃やす。タレントどもは天を仰ぐ。

スキャンダルこそ我が命。情報が入れば、ポルシェ・カレラですっ飛んでいく。真っ黒なカレラ。地獄の底からすっ飛んでくる真っ黒な死霊。黒い影に気づいたときには、すでにシャッターは押されている。まばゆいフラッシュがすべてをとらえている。

おれは下種野郎どもを食い散らかして、下種野郎どもから下種野郎と呼ばれている。

連中は間違っている。おれが欲しいのは金じゃない。脳髄がとろけるような悪徳の

匂い――秘密の香り。おれはそいつに中毒している。

1

タレコミ屋にばらまく金はけちるな――けちったことはない。稼ぎの大半は情報料に消えている。口さがない連中はおれを死肉を漁るハイエナ扱いし、下種なスキャンダルで稼いだ金をたっぷり貯めこんでいると吹聴している。

冗談じゃない。おれは荻窪の家賃十二万のワンルームマンションに住んでいる。数万もするステーキを食う代わりにマクドナルドを貪っている。一貫三千円の大トロを食う代わりに鯖みそ定食で飢えをしのいでいる。大食らいのポルシェのために週に数十リッターのハイオクガソリンを買い与えている。ハワイにはエコノミーで飛ぶ――そのうち、ＪＡＬの幹部のスキャンダルを握ってやる。着ているジャケットは裾がすり切れている。おれはたんまり稼いでいる。だが、稼いだ分は残らず吐き出している。そこのところが連中にはわからない。

ポケベルに連絡が入る。西麻布にある無国籍料理が売り物のレストランの店長。そこは芸能人でいつも賑わっている。下々の者どもには存在さえ知られていない隠れ家

として信用されている。そこの店長がタレコミ屋だとはだれも気づいていない。おめでたい連中。頭が痛くなる。

公衆電話に飛びついて電話をかける。

「おれだ」

おれはいった。

「今、店に古谷麗子（ふるやれいこ）と佐竹英之（さたけひでゆき）が来てるんです」

店長がいった。売れ線から外れていった女子大生崩れの二流タレントと、最近はとんと名前を耳にすることもなかったかつてのアイドル歌手――要するに一発屋。スキャンダルとしての価値は泣きたくなるぐらいに低い。

おれは頭の中のファイルをめくる。古谷麗子――やくざまがいの金融屋の情婦になってちまちまと金を稼いでいるはずだ。佐竹英之――ファイルは空欄のまま。十年ほど前にデビュー曲が十万枚を超えるヒットになったが、その後は鳴かず飛ばず。世の中に忘れられようとしている女タレントとすでに忘れられたアイドル歌手。

「なんか、凄（すご）い険悪な雰囲気なんですよね。栃尾（とちお）さんは気に入らないだろうとは思ったんだけど、あの雰囲気なら面白いかもと思って」

店長の声は弾んでいる。おれに頼まれて出歯亀（でばがめ）稼業を続けているうちに、他人の秘

密を覗くことにひとかたならぬ喜びを見いだすようになった男だ。

おれの脳味噌は煙を立てて回転している。古谷麗子――金融屋の情婦。冴えない元アイドルと付き合って自分の立場を危うくするほどの馬鹿とは思えない。佐竹英之にしても、今さら古谷麗子クラスのタレントと浮き名を流しても華々しいカムバックを飾れると考えるほど若くはない。

きな臭い。秘密の匂いがする。だらしなくぶら下がっていた男根が、少しだけ固くなる。

「店に来てからどれぐらいだ？」

おれは訊いた。

「もうそろそろ二時間ってところですかね。雰囲気が険悪になったのは三十分ぐらい前からです。デザートのオーダーが来てるんで、あと少しでお帰りでしょう」

「わかった」

おれは電話を切った。ポルシェに飛び乗って西麻布を目指す。写真週刊誌には売れないネタだ。だが、古谷麗子のパパはそれなりに金を持っている。古谷麗子の弱みを握れば、タレコミ屋どもにばらまく資金の息継ぎができる。

五速全開でポルシェを飛ばす。カセットデッキからはＲＣサクセションの『雨あが

りの夜空に』がフルボリュームで流れてくる。

どうしたんだ、Ｈｅｙ Ｈｅｙ Ｂａｂｙ、バッテリーはビンビンだぜ――そう、おれもビンビンだ。秘密の匂いはおれを奮い立たせる。ガンジャもコカインもエクスタシーもこれにはかなわない。

店の前でエンジンを切り、ニコンのカメラのフィルムを高感度のものに詰め替える。ふたりが出てくるのを待つ。粒子が粗いほど緊迫感が増す、後ろめたさが強調される。スキャンダル写真は明るいものより暗いものの方が歓迎される。フラッシュは敵にとどめを刺すときの最後の武器だ。

五分後にふたりが出てくる。佐竹英之がしきりになにかを話しかけている。古谷麗子は表情を強張(こわば)らせている。相思相愛のふたり――そんな雰囲気は微塵(みじん)もない。邪険な古谷麗子。未練がましい佐竹英之。ふたりの間にあるのは色恋ではない――曖昧(あいまい)な確信。ふたりの間にあるのはもっと秘密めいたなにかだ――あやふやな期待。

シャッターを押す――カシャ、カシャ、カシャ。ファインダーの中でふたりの時間がぶつ切りにされる――カシャ、カシャ、カシャ。

佐竹英之がタクシーをとめた。古谷麗子はじっと待っている。佐竹英之を袖にするわけでもなく、表情を強張らせたまま夜の闇の中で立ち尽くしている。佐竹英之が古

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com